

これからの活水教育が目指すもの



高校生は、大学に何を期待しているのでしょうか？

湯口校長 もちろん、生徒によって違いはあるのですが、私が長崎の高校生に感じるのは、就職を考えて進路を決める傾向にあるということ。それは、ここ数年で、高校を卒業して就職する生徒が増えているのを見てわかります。進学を希望する生徒にしても、活水女子大学で言えば、看護師になりたいから看護学科、保育士になりたいから子ども学科に進学したいと、専門分野を明確にしている印象です。

就職を見据えた進路について、教育の現場ではどう考えているのでしょうか？

校長 長崎は、都市圏と比べて地場産業が少なく、その意味で仕事に限られています。ただ、そんな中でも「活水で学びたい」と思ってもらえるよう、高大連携で特徴を見出しながら、あるいは地元との連携を模索しながら、教育を進めています。希望をいかに持ってもらうか、そして、能力をいかに開花させ、自立した女性を育て上げていくかが、私たちの一番大きな目標です。

加納学長 学生たちは、「現実が厳しい」と肌で感じているのかもしれませんが、私は、「いや、そうではない。学生自身が夢を持つことが、長い目で見て大事だ」ということを伝えたいですね。

目の前のことであれば、その場を対処するだけで足りず。しかし、30年後、50年後の先も見渡せる視野を持たせるのも大学の務めだと感じています。私たちはより長い時間のスパンで、社会の流れや、人間の行くべき道をわかってもらえるよう心がけたいと思います。

資格取得や就職だけを目指している人たちに向かって、「それも、たしかに大事だけど、せっかくなら、もう少し先のことを考えてみない？」と呼びかけたいですね。「当面の夢は叶うかもしれないけれど、もっと大きな、日本人全体にとっての夢であるとか、世界の女性にとっての夢があるでしょう？」と。活水女子大学は「期待した

ものを提供する」のはもちろんですが、「期待していないものも提供できる」大学でありたいと願っています。

校長 先ほども言ったように、生徒はすごく現実的です。でも、教員自身も現実的なだけであれば大学で学ぶ必要はないと思います。目の前の学びだけであれば専門学校でも良いと思いますし、大学と専門学校の違いは、予想外の気づきがあるかどうかだと考えるからです。

そして、「気づき」を生徒に分かってもらうには、教員自身が魅力的でなければいけません。そのためにも、教える側も「ここまでいいか」ではなく、「現実はこちらかもしれないけど、私はこう思う」と、はっきりとしたビジョンを持つことが重要なのですね。

活水の場合は、建学の精神で「聖書」という明確なビジョンを持っていますが、それをどういう風に現代的に解釈して、教員自身が希望を持って語っていけるかが大切だと思いますし、一人ひとりがそれを実践できれば、活水の教育はもっと魅力あるものになると思います。

目標があって、それに打ち込むのももちろんだけど、それ以外にも目を向けてもらいたいということですね。

学長 ある人類学者が「人間は、他の文化を見るときに、自分が理解可能な範囲でしか見ることができない」と言われたそうです。ただ、理解可能な範囲とは、自分が思うよりももう少し大きなものであるらしいのです。自分で想像力を膨らませて理解可能な範囲を広げると、吸収できるものも大きくなりますし、範囲が広がった状態での次の経験ではキャパシティはもっと大きくなるでしょう。また次の経験ではさらに大きく、と、このように少しずつ、でも確実に成長できるわけですね。

この意味で「期待していないものとの出会い」は、自分を成長させてくれるチャンスでもあるのです。

校長 特に活水女子大学の優れた点は、与えられたものを単に覚えるというだけではなくて、ちょっとした事柄の中からも、何かを大きく膨らませていくことができるころにあると感じています。これは、教員と学生との交わりによって生まれることが多いからです。

先ほど、活水女子大学が持つ「聖書」というビジョンについて触れられましたが、キリスト教教育について、もう少し詳しくお話をお聞かせください。

学長 私たちが確信しているのは、キリスト教で掲げている理念は、「人間としての基準である」ということです。「隣人を大事に

する」、「弱い人に目を注ぐ」、「人間はみな平等」といった理念は、世界中の人々に通じます。イエス様を信じるとか、信仰を受け入れるという次元の話ではなく、人間が生きてゆく上で最も基本的な姿勢にかかわるものだと思います。

活水女子大学には、キリスト教学やチャペルアワーなどがありますが、大学としては、その考え方を押し付けているわけではありません。「こういう考え方があります」と提示をして、学生が何かを感じてくれたら、と思っています。

校長 今、盛んに言われているグローバル化は、実はキリスト教が最も得意とする分野だと思います。「隣人を愛せよ」という考え方は、他者理解、異文化への理解につながります。形だけのグローバル化ではなく、きちんと異文化を理解した上でのグローバル化が重要だと考えるからです。

それができて初めて、世界でもリーダーシップをとれる人材になるのではないのでしょうか。

学長 グローバル人材とは外国語力の問題ではないのですよね。例え言葉ができなくても、相手を愛していれば協力できるのですから。

逆に現地の人から愛されることも、グローバルな人材として必要なことだと思います。「郷に入っては郷に従え」と言いますが、異文化への愛がないと、現地の人から愛されることもありませんよね。

校長 それらの姿勢は、礼拝の時間に集約されると思います。活水ほど礼拝の時間をきちんと行う学校は少ないと思いますが、それは本人のためになると信じていますし、現に卒業生は皆さん「活水で学べてよかった」と仰ってくださいます。

最後に、女子教育として、活水の教育が目指しているものは何でしょうか？

学長 「女子大学」について、日本には二つの考え方がありました。一つは、男女の役割は別だという立場から、女性特有の教育を行う考え方。もう一つは、男女が等しく社会に参与すべきとの立場から、女性にも男性と同じ教育を行うという考え方です。私は後者の立場をとります。でも後者の考え方は、男女共学が進む現代では、その意義が薄れてきています。それでも今に、「自分の研究の後継者に男子学生を」と考える教員が多くいるのも事実です。これでは、女性は十分にパワーを発揮できないわけですね。

ですから、女子大学があって、女性に対して「頑張ろうね」とエールを送ることは今日でも必要だと考えます。

男性がやらなかったこと、気が付かなかったことで、女性がDNA的に持っていることを発揮するのは重要です。男性と敵対するのではなく、共に活動できることが大切だと感じています。

そのような女性ならではの力や魅力が発揮できる場があることを、活水女子大学で学んでいただけたらと思います。

校長 これから女性が社会でもっと活躍するためには、はっきりと自己主張ができ、自律した女性であることが望まれるでしょう。

シェリル・サンドバーグの『LEAN IN』という本によれば、アメリカでさえ、管理職になる女性は30%に満たないと言います。これら現実に対し、自覚的に声をあげられるかどうか、ということです。

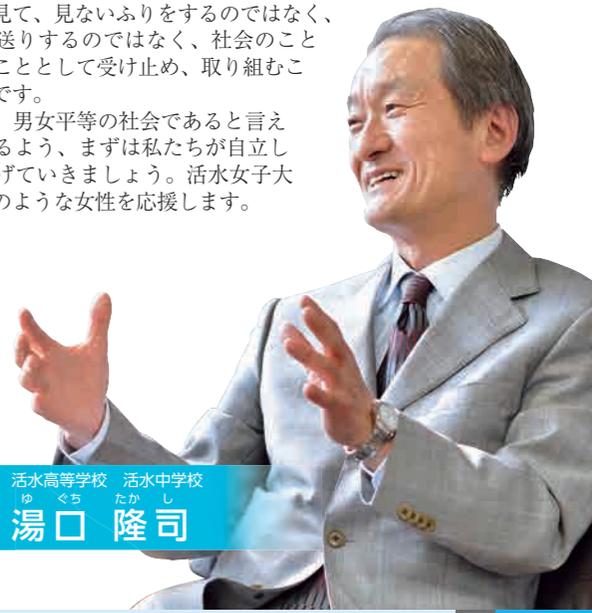
平等な社会と言いますが、それを行使できるだけの勇気と積極性を持てるよう、中学、高校、大学と連携して育てていかなければならないと思います。

学長 そのためにも、私が特に重要だと思うのは「Independent Learner」を心がけるということです。「たとえ一人でも学ぶ」、つまり、誰かがいなくても、自分で問題を発見し、解決策を見出す力を身につけるということです。

これは、学生時代に限ったことではなく、社会に出てからも、そして私たち教員自身にも当てはまることです。

問題を見て、見ないふりをするのではなく、解決を先送りするのではなく、社会のことは自分のこととして受け止め、取り組むことが必要です。

本当に、男女平等の社会であると言える日がくるよう、まずは私たちが自立して声をあげていきましょう。活水女子大学は、そのような女性を応援します。



活水女子大学 学長 加納 孝代
 活水高等学校 活水中学校 校長 湯口 隆司